高尾山報 令和3年12月号 毎月1回発行 通巻第695号

高尾山報

令和3年12月号

天狗見て ござる高尾の 山紅葉（やまもみじ）

法の水茎

大正大学講師　髙橋秀城

(114)

年光は
自ら燈の前に
向うて尽きぬ
客の思ひはただ
枕の上より生る

（『和漢朗詠集』尊敬）

（年月は瞬く間に過ぎゆき、今年も灯のように尽きようとしている。そんな人生の旅路の愁いが、冬の枕元から込み上げてくる）

錦を織った山々の紅葉も、時雨のような風を受けて、すっかり枝から離れ落ちました。今年も気づけば歳末。月並みな言い方ですが、月日の流れの早さが身に沁みます。

冒頭の漢詩のように、人の一生はロウソクの炎のように燃え尽きてゆくのでしょうか。寒さを感じる冬の深夜に、胸の鼓動を感じつつ人生の儚さを実感します。

これまで十数回にわたって「道」をテーマに書き進めてきました。お釈迦様が悟られた成道や出家の道、薪や花の仏の道、星・月・雲の通り道の話など、「道」は仏さまの教えとも深く関わっています。そこで今回はその一区切りとして、「正直の道」について書いてみたいと思います。

「正直」と聞くと、どのような言葉を思い浮かべるでしょうか。「素直さ」を表す「子供は正直」という言い回しや、「確実性」を意味する「三度目の正直」、愚直な「馬鹿正直」という要領の悪さをイメージするかもしれません。「正直」には、さまざまな意味合いが込められています。

次のような和歌があります。

日暮れたり
いざ帰りなむ
子泣くらむ
その子の母も
我を待つらむ

（伝藤原定家『桐火桶』）

（日が暮れてしまった。さあ帰ろう。家では子供が泣いているだろう、その子の母も私を待っているだろう）

この歌は、室町時代の歌人によって、誠実な「正直の歌」と評されています（馴窓『雲玉集』）。冬が近づき、日ごと夕闇が迫ってくる中で、家路を急ぎたくなる気持ちも分かるような気がします。素直な思いは、今も昔も変わりません。

「正直」（素直）は、神仏の教えとも結びついています。例えば『西行物語』には、伊勢神宮の社殿について、千木や鳥居、鰹木や垂木などの建築様式が、曲がらずに真っ直ぐ造られているのは、「人の心を素直にさせよう」とする神様の思いを、私たちに伝えているのだという話があります（無住『沙石集』などにもあり）。

人の一生にもたとえられるロウソクの炎

仏教においても「正直」は重んじられています。仏教語で「正直」は「片寄らず、心が素直」の他にも、「真心をもって接すること」、「仏を信じて疑わない心」、「一切の執着を離れた悟りの境地」といった意味も内包します。「正直」は、仏さまの教えに沿った道を一途に歩むことでもあるのです。

平安時代末期に生きた真言宗中興の祖と崇められる興教大師覚鑁上人（一〇九五～一一四三）のお弟子さんに正直上人（？～一一七七）という方がおられました。正直上人は、長年覚鑁のお側近くに仕え、師の命には背くことがなかったそうです。常に修行を怠らず、念仏・観法（仏様を心に思い浮かべる修行）を行いながら亡くなられたと伝えられています（如寂『高野山往生伝』）。その名の通り、仏の道をひたすら突き進まれた御生涯であったと思われます。

「正直な仏の道」とは、いったいどこに存在しているのでしょう。やはり厳しい修行の先に見えてくるものなのでしょうか。この問いをめぐっては、有名な一休さん（一休宗純、一三九四～一四八一）のとんち話が残されています。

ある日、一休和尚のもとに信者の男がやって来て「私に何か先人の有り難いお言葉をお授けください」と言いました。和尚が「では、仏の道で疑問があれば尋ねなさい」と話すと、男は納得し、そのまま仏殿に向かって走り出し、すぐさま帰り戻ってきました。

和尚が理由を聞くと、「仏の道は仏殿に通じる道と考えたので見てきました。山門の側にあった鳥の巣は、鶯の巣だったのでしょうか」と語るのでした。「烏かもしれないぞ」と言って巣を下ろさせると、中には何もありませんでした。

和尚は一句を口ずさみます。

鶯の巣を
おろして見れば
からすにて

和尚が「これに付句（七七）をしなさい。課題ですよ」と言うと、「何も思い浮かびません。どうか、答えをお教えください」と食い下がります。

和尚は言いました。「仏性（仏の心）は他人に教わるものではない。自分の心に見出すのだ」と。男はこの言葉に感心し、ついには自分で悟りを開いたそうです。

（『一休ばなし』）

ここに登場する男は、仏の道は仏堂への道と考え一目散に走り出しました。一休和尚は「空の巣」と「烏」を掛けた洒落句を作るなど、男の言動を馬鹿にすることなく温かな目で眺めています。悩む男にお手本となる句を示さなかったのは、自分の外側にではなく、心に問いかける大切さを教えるためでもあったのでしょう。自心の奥底に答えが隠されていると気づいた時、はじめて仏の道のスタートラインに立てたのではないかと考えます。

おろかなる
心の内を
尋ねみよ
ほかに仏の
道しなければ

（『後鳥羽院御集』）

（不完全でいい加減な自分の心の中を探ってごらん。心の外に仏の道はないのだから）

「正直の道」には「正しく真っ直ぐな人の道」という意味があります。法の灯で心の暗闇をそっと照らせば、誰にでも誇れる「正直の道」が、どこまでも一直線に続いているでしょう。

（栃木北部教区普濟寺）

折り折りの記 (148)

シモバシラ氷の花咲く髙尾山

波多野　重雄

十二月の中旬以降、高尾山の女坂の石垣上の、土手の斜面に霜が降り始めると、奥の山中に湿っぽい柔らかな地質の所に、シモバシラが咲き染める。

山中の水分が柱上の氷の結晶となって、土を持ち上げ林立する。これを霜柱という。太陽が昇ると簡単に崩れてしまい、山奥の日陰では土くれのついたまま崩れる。

髙尾山の太陽の陽の差さない日陰では、一日中土くれのついた霜柱が残り、一種の景観を呈す。「ふみ立ちて　見て霜柱　力あり」の高濱年尾の句をおもう。

（髙尾山健康登山の会会長）

百観音霊場巡礼 (29)

冬遊妙福山佐竹寺

厚木市　荒井　一雄

桃山格式本堂鮮
銀杏黄葉映紺天
白鬚長老笑満面
誠心集印御宝前

掛軸と
ご朱印帖にあらたなる
大悲殿の字　仲間に入れき

冬、妙福山佐竹寺に遊ぶ

桃山様式の本堂は鮮なり…
銀杏の黄葉は
紺碧の空に映ず…
白鬚のご長老は満面の笑み…
真心込めてのご朱印を施す、
ご宝前にて…

いけばなの心㉒

華道教授　佐藤　宗明

秋が終わり冬になると、葉が散ったり、枯れたりする草木が多くなってきます。山の色も緑から赤や黄色、そしてさらに色褪せて茶色に見えてきます。

そんな中でも、落ち葉の下や岩陰を見るとお花が、ひっそりと咲いていたりします。色鮮やかな花が咲き乱れる時期の花も美しいですが、思いがけず見つけた花も大きな感動を与えてくれます。

今回の作品はそんな感動を、『二重切』という花器で生けてみました。二重切は竹を加工して作られた花器で、上下にお花を挿す場所があります。今回、上の重には枝垂れる姿が魅力的なツルウメモドキを挿し、根〆に白い小菊を入れて姿を整えました。下の重は紫の竜胆一種でまとめ、物陰から光を求めて伸びたつような力強さを表現しました。冬は瑞々しいお花が少なくなってくる時期です。いけばなはそんな時期でも季節感を大切に、一輪の花から感動を表現する事が目標の一つです。

おかげさまで今年も作品を紹介させて頂くことができました。誠にありがとうございます。また来年もいけばなの魅力をお伝えできればと思います。皆様良いお年をお迎えください。

花材：ツルウメモドキ、小菊、竜胆

七五三おめでとう

佐藤楓ちゃん

下田成夏くん

桑澤莉珠ちゃん

山主入山慶祝の集い
大般若経転読会法要
八王子車人形特別公演

十一月二十一日(日)

十一月二十一日、昨年十二月に佐藤山主が高尾山中興第三十三世として法燈を継承されたことを記念する慶祝法要として、大般若経転読会が行われました。大般若経とは、三蔵法師の名で知られる、玄奘三蔵が「般若経典」を集大成した一大叢書であり、国家安穏や除災招福などのご利益があり、古来より宗派を問わずに転読が行われてきました。

当日は転読会において、新型コロナウイルスにより混迷を極める世情が安定するよう、人々の心が安らかになるよう、参列の御信徒共にご祈念申し上げました。

法要後には佐藤山主の記念法話に続き、日本遺産「**霊気満山　高尾山**～**人々の祈りが紡ぐ桑都物語**～」の構成文化財である、八王子車人形の西川古柳座による特別公演が行われました。公演では、天下泰平や五穀豊穣を祝う、大変おめでたい舞である三番叟を始めとした様々な演目が行われ、参列された人々はじっくりと見入っておりました。

佐藤山主による記念法話

国家安穏を祈る転読会

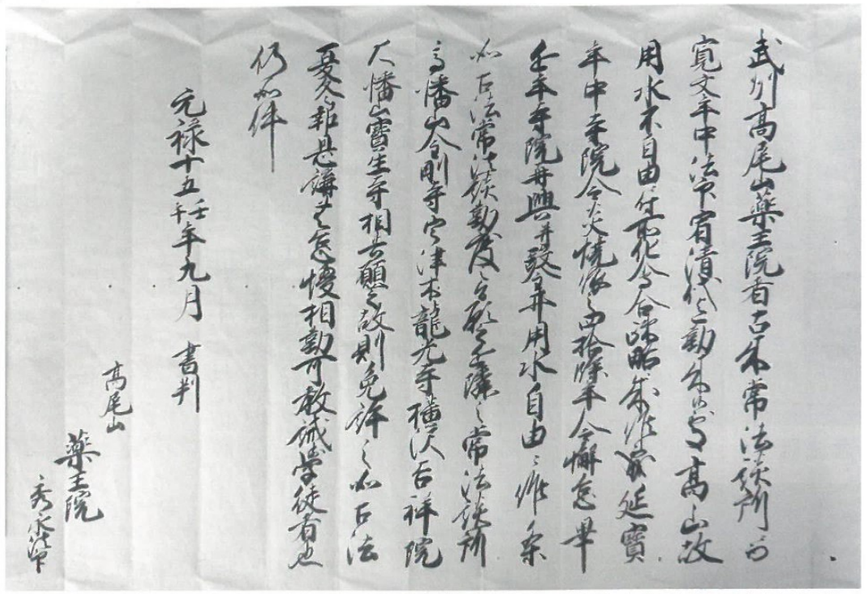
八王子車人形・西川古柳座による三番叟の舞

高尾山年代記 24

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

十四世秀永1　常法談所の復興



十四世秀永に宛てられた常法談所復興の免許状写し（法政大学多摩図書館寄託）

天保四年（一八三三）の由緒書は、一四世秀永の在住を先代賢俊の寂年である宝永五年（一七〇八）からとしているが、薬王院文書は元禄一二年（一六九九）八月七日に執行された伝法灌頂が山主の交代時期であったことを示している。

特記される秀永の事績

寛延三年（一七五〇）付の高尾山縁起に、秀永の事績として次のような文章がある。

憲廟の時。刹主秀永東都に入り。祠部の吏に請いて曰く。昔は我が山、朝命を承くること厚し。衆僧を集め。経論を講習す。是を檀林となす。越すに以って巌険にあり。薪水に労す。四方の僧徒至らず。法壇、久しく廃す。命を賜い旧に復し得るを伏して願う。秀永力を法談に竭し。以て衆僧の率とならん。祠部聞くを以って。教えて曰く。可なりと。実に元禄十五年なり。

「檀林（談林）」とは僧侶の教育機関のことである。「憲廟」とは五代将軍綱吉の法名「常憲院」を指している。「祠部」とは寺社行政を司る機関の意味となるが、これについては後述する。その時代、山上という立地に制約されて廃絶していた談林を復興し、僧侶の教育に尽くしたいとして願い出た。それが元禄一五年（一七〇二）に認可されたということである。

縁起に記される徳川将軍の名は家光と綱吉の二人であり、この談林復興は三代将軍家光による寺領領知と並べて記される形となっている。その修辞の効いた文章からも、このことが寺史の上でも特筆すべき出来事と認識されていたことが理解できる。この談林復興にはいかなる意義があったのだろうか？

常法談所の復興

その元禄一五年九月付で「高尾山薬王院秀永法印」と宛所にある談林（以下、薬王院での復興については史料上の用語である「常法談所」を用いる）復興に係わる免許状の写しが残る（写真）。それによると、薬王院は古来より常法談所であり、寛文年中（一六六一～七三）、祐清の代まではそれを勤めていたが、山中にあり水の便にも事欠くため学僧の集まりも悪くなり、延宝年中（五年・一六七七）の火災によって、以来、活動を停止していたところ、近年伽藍の再興が成り、井戸も掘削して水の便もよくなったので、古来の通り常法談を勤めたく、近隣の談林である高幡山金剛寺・宇津木龍光寺・横沢吉祥院・大幡山宝生寺もともに願い出たので免許する。古来の通り夏冬の報恩講を怠ることなく勤めよ、としている。実際に願い書としても同年八月付で僧録大僧正（護持院隆光）に宛てた普門寺以下門末寺院と所在の上椚田村村役人の連名による写しが残る。この出願は隆光の日記にも、九月七日の記事に、先の免許状写しとほぼ同様の経緯とともに、願い出が近隣の四ヶ寺が証人となって連判で出され、智積院・長谷寺の両能化の賛同も得たので認めた、と書かれており裏付けが取れている。

隆光が住持する護持院は元の湯島知足院のことで、新義真言宗の触頭（※1）である江戸四箇寺の一寺であったが、綱吉の帰依によって将軍家祈祷所となったことから湯島根生院と交代した。隆光は元禄八年（一六九五）に大僧正に昇進、僧録職に任ぜられ、智積院・長谷寺の能化の上位に位置するとともに、将軍の側近として権勢をふるった。なお、綱吉に犬を大切にするよう進言した逸話が知られていたが、これは事実無根であり綱吉との距離の近さを示唆するものであろう。隆光は新義派教学の体制を確立した人物として評価されている。

さて、では秀永がこの時期に常法談所の復興を願い出た意義について考えてみよう。元来、談林というのは仏教の教義を考究する集まりとして自然発生的に生まれたものとされているが、徳川幕府が僧侶の本分を教学とする法度を定め、住持を勤める条件として二〇年の修学期間を求めたことから、俄然、その存在意義が変化する。寺院の本末関係には、修法の密儀を継ぐ事相と、教義を修学する教相の双方があったが、徳川政権が修学を重視したことにより、教相の本山である智積院・長谷寺小池坊による支配が実効力を増して行った。

しかし、折柄、宗門改（※2）の関係もあり地方寺院が多く開創される時期に、この修学年限はなかなか徹底せず、総本山の側も地方での修学の状況をなかなか統御できなかったようだ。寛永九年（一六三二）付の智積院・長谷寺小池坊両能化による「定」では、無免許の常法談を停止する一方、数年の修学を積んだ者の田舎本寺（地方本寺）における法談は苦しからずと前々からの慣行を否定していない。そして、延宝三年（一六七五）になって、ようやく無免許の古檀林を禁じることになる。そして、ちょうどその免許の出願時期に高尾山は火災に見舞われたわけである。

秀永の英断

前号で取り上げた色衣免許の触れは、元禄八年十一月という隆光の僧録就任間もない時期の発出で、これは隆光による新義派諸寺院の教学秩序確立に向けた政策の第一歩であったと考えられる。その際には寺領朱印地の有無、将軍拝謁時の格式や本山での修学年に加え、常法談所であるなしが色衣認可の基準とされた。薬王院が認められたのが浅黄・香色（※3）の二色に止まった理由として常法談所の問題があったようだ。

先述の通り、住持となるためには修学の実績が必要で、その機会を設けられるか否かは僧侶の人事をも左右する重要な条件となっていた。それは薬王院のような田舎本寺にとって、門末支配を維持する上で不可欠な資格としての性格を帯びていたものと思われる。そして、教学の体制確立とともに常法談所であることが寺格の基準となり、後には総本山の能化選出に参画する権利も有することになる。このタイミングでの出願は寺勢興隆を考えると、絶対不可欠なものだった。

そして、認可に至った決め手として、隆光の日記に記載があったように、近隣の談林寺院の賛意が指摘できる。それには、周到な事前交渉があっただろうし、常日頃から近隣の寺院と良好な関係を維持することが不可欠であっただろう。かくて、秀永による常法談所の復興は縁起に特筆される事績となったのである。

註

※1　寺社奉行の配下として寺社行政を司る愛宕真福寺ほかの寺院。

※2　幕府はキリスト教取締りのため、特定の寺院の檀家であることを身分保証とした。

※3　浅葱色（薄い青）を浅黄色と表記する場合がある。香色はごく薄い茶色。

《参考文献》櫛田良洪『真言密教成立過程の研究』（山喜房佛書林、一九六四）、同『続真言密教成立過程の研究』（山喜房佛書林、一九七九）、中島由美「高尾山薬王院の談林再興と報恩講について」（村上直編『近世高尾山史の研究』名著出版、一九九八）

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

■健康登山者投稿作品■

季節の写真「夕暮れの富士」

高岡 輝幸 様

高尾山 季節散歩

暦の言葉　「七十二候」

麋角解

「さわしかのつのおつる」

十二月二十六日～十二月三十日頃

鹿が頭の角を落とす頃を意味しております。ただし、日本に住む鹿は、春に角を落とすのが一般的です。

ここで使われている「麋」とは、大陸に住むヘラジカを指す言葉とされております。

今月の風物詩

こたつ

寒さが本格化してくると、「炬燵」が欲しくなります。

今でこそ、電気ごたつが主流になっておりますが、かつては囲炉裏の構造を利用した、腰掛けて座れる「掘りごたつ」が多くの家庭にありました。

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

百七段　最後まで気を緩めない

「百里を行く者は九十を半ばとす」という言葉にもあるように、最後まで気を緩めないことが肝要です。何事も途中で油断することから失敗は生じます。上手く物事が進んでいるからこそ、気を引き締めることを忘れてはいけません。

閉瀑式厳修

十月三十一日(日)

高尾山には、蛇滝及び琵琶滝という滝行を行う水行道場があり、毎年十月三十一日には両道場において、一年間安全に修行できたことを感謝する、閉瀑式が行われております。

琵琶滝（左）と蛇滝（右）で行われた閉瀑式

院内散歩 57

～薬王院の展示物～

書画「おくのほそ道」　那須

かさねとは
八重撫子の
名なるべし

句・曽良

作：小田嶋十黄

成田山勧学院生来山

十月二十八日、真言宗智山派・大本山成田山にある、僧侶の修行教育を目的とした勧学院の修行僧七名と引率の二名が、紅葉が色づき始めた高尾山に来山されました。

一行は特別大護摩供修行にて、修行の無魔成満を祈念ざれました。

成田山勧学院は、総本山智積院にある、智山専修学院と同様に、大勢の優秀な僧侶を輩出しています。

佐藤山主と記念撮影

祝　記念登山

大澤参拝団　登山九十回

十一月二十四日、秩父よりお越しの大澤参拝団は、今回で登山九十回目を迎えられました。

大澤参拝団は、昭和二十五年に先代団長の大澤五一様により結成されました。五一様は昭和七年に初めて高尾山を参拝され、最初の頃は秩父から自転車で訪れていたそうです。

現在ではご子息の大澤英夫様（写真前列左より四人目）が二代目団長として、団参を続けられております。英夫様は、今後もたくさんの団員と共に高尾山に訪れたい、と語っておられました。

九十回登山を達成された大澤参拝団の皆様

観音菩薩の宗教 ㊽

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

観音菩薩の転生者としての聖徳太子（その11）

聖徳太子を副題に掲げながらも、前号ではモンゴルの「神仏習合」について述べ、若干主題から横道に逸れた。閑話休題。再び観音菩薩を本地とする聖徳太子についての考察に話を戻そう。

これまで述べてきたように、聖徳太子は最初にインドの勝鬘夫人に転生し、次いで震旦（チーナスターナ＝現在の中国）で転生を繰り返したのち、日本で用明天皇の皇子として生を享けた。『聖徳太子伝』は、「粟散國（粟粒を飛ばしたような小さな国）」すなわち日本における太子の歴史的な事跡を述べている。そのひとつが崇仏派の太子が排仏派の物部氏を挫いた丁未の乱（物部合戦）である。以下は、仏教が百済より日本に伝わり、仏像が欽明天皇に献上されたときの記事である。

「天皇、おほきによろこびたまひて、つかひの臣を大殿にめしいれ、えんをまうけ、引出物数々たまふ。百官をあつめて、詔してのたまふ、

『百済国よりわたすところの仏像、あがめたてまつるべし、いかん』

この時、尾輿大臣、かうじやうにそうし申やう、

『天朝のそのかみより、当代のいまにいたるまで、わが国の風俗として、神祇をあがめまつるなり。他国の仏像、経論は、異国の習俗なれば、祖廟にそむくなり。かたちは、西国の亡人の体也。そのうへ、新羅・百済・高麗、三韓はわが国の古敵なり。かやうのものどもをわたし、朝儀をはかり、国家をかたぶけんためなり』」

（杉本好伸校訂本、一二〇頁）

その意味は次のごとくなる。仏像が百済から伝わり欽明天皇に献上されると、天皇はたいへんお喜びになったが、それを礼拝してもよいのかどうかを家臣たちに尋ねた。物部尾輿は、「日本は神々の時代から今に至るまで（日本古来の神道の）神々を尊崇してきました。外国の仏像や経論は異国の習俗であるから（これを尊崇すれば）天皇家の祖先の御霊に背くことになります。（仏像の）形は、西の国の死者の姿です。そのうえ、新羅・百済・高麗の（朝鮮半島の三国である）三韓は日本の古くからの敵です。（百済が）このようなものを（日本に）渡すのは、朝廷の儀式を誑かして、国家を傾かせるためでございます」と述べて、礼拝に反対した。

蘇我氏と物部氏のあいだの意見の対立は夙に『日本書紀』に記されたことであるが、『聖徳太子伝』が物部氏の口を通じて述べた踏み込んだ政治的解釈は興味深い。すなわち、仏像は朝鮮の日本を弱体化させる国家的策謀のため送られたものとする見解である。物部氏が排仏派と称される所以であるが、この主張を現代に則すれば、ナショナリスティックな排外主義者とも表現できよう。

両者の議論は平行線をたどったまま、長年月が過ぎた。聖徳太子は両者の決着がつく前にも仏教を受容し、堂塔建立などをしたという。物部氏によれば、こうした聖徳太子の仏教護持により古来の神々が怒り、日本に災いが起きたとする。尾輿の子の物部守屋は時の帝の敏達天皇に次のように奏上した。

「わがてう日本国は、神のはじめてつくり出し給へり。かるがゆえに、神国となづく。上一天の君より下万民にいたるまで、貴賤上下のしゆじやうを、うみそだて給ふゆへに、神の氏子也。国のまつりごとは、神事をさきとす。しかるにいま、聖徳太子、はじめて我国に堂塔をたて、かの異形のものをあがめ給ふゆへに、日本神明の霊あれて、疾病の災いをおこしたまへり。ひとへにこの異形の物、あがめ給ふゆへなり。天下のおほきなるなげき、国土のさいなんなり。はやく、御ゆるしをかうむつて、かのだうたう、仏像を、ほろぼしなんと存じ侍る」

（同、一〇三～一〇四頁）

ここで守屋が述べた意見の根拠は、日本は本来、神々の国であり、政治は神事によって行なわれなければならないとすることである。それにもかかわらず、聖徳太子が仏教の堂塔を建て、仏像を尊崇したために日本古

来の神々の不興を買い、国中に病気などの災いが蔓延した。それゆえに、守屋は敏達天皇の勅許を得て、仏像などを破壊したいと申し上げた。仏像の破壊などはすでに守屋の父の尾輿もしたことで、守屋はそれを徹底したいと主張したのである。

しかしながら、敏達天皇は勅許を出さず、「なんぢが父尾輿大臣、邪見によつて、彼如来を」（同、一〇四頁）破壊したと守屋を糾弾した。

勅許が得られなかったにも拘らず、守屋は聖徳太子が「はじめてつくるところの堂塔仏閣をやきはらひ、仏像経巻をめつぼう」（同、一〇六頁）する破壊行為に出た。『聖徳太子伝』は、こうした尾輿父子のことを糾弾し、「仏滅破滅のあくねん、いよ〳〵ふかくなり侍りき」（同、一〇四頁）と記す。「あくねん」とは「悪念」で、邪悪な考えを意味する。

その後、議論による穏健な解決はもたらされず、太子や蘇我氏の崇仏派と物部氏らの排仏派は実力行使の内戦となった。日本史上、唯一の宗教戦争ともいうべき内戦である。この戦いにおいて聖徳「太子は、これ、観音の顕現、慈悲利生の薩埵」とされ、一方の「守屋は、すなはち、地蔵菩薩の変化」とされている（同、一六三頁）。『聖徳太子伝』は、地蔵菩薩が邪険を顕したのは、仏法の不思議を顕すためであるとしている。また、地蔵菩薩の変化たる守屋が怨霊となったとする説もある（松本真輔「中世聖徳太子伝における物部守屋像―怨霊化する守屋・地蔵の化身としての守屋」『国語国文』京都大学文学部、二〇〇三年）。

この内戦が先に述べた物部合戦、丁未の乱である。その結果は古く『日本書紀』などが伝えるように、太子などの崇仏派が勝利を収めて仏教が取り入れられ、仏教は後の発展の基礎を固めることとなった。ことに聖徳太子は、仏教の教えに基づき神道をも尊重しつつ日本を導いていく。『聖徳太子伝』はこうした太子の事跡を総括して以下の如く評価する。

「太子、仏法の怨敵、守屋を降伏して、御心の儘に、此国を化導し給う御年三十一歳（後略）」

（同、一二二頁）

ここでいう三十一歳とは、推古天皇元年（西暦五九三年）に太子が摂政となり、薨去する推古天皇三十年（西暦六二二年）までの数えの三十一年間を指す。そのあいだ太子は「此国」すなわち日本を仏教により教化・教導したと評価する。

物部氏の排除以上に広く知られる聖徳太子の事跡は、『一七条憲法』の制定である。このことについて『聖徳太子伝』は次のように述べている。

「生身の観音、むかしわが朝化来ましく、て、仏法の一道のみひろめ給ふにあらず、世間政道のはかりごとまで、さだめをき給へり。その十七ケ条に云」

（同、二九二頁）

言葉を補いつつ現代日本語にすれば以下の如くなろう。

「観音菩薩の化身として生身の身体を有した聖徳太子は、太子伝が書かれた現在より遡る昔に日本国に姿をお現わしになって、仏法という一つの道を弘められたことだけではなく、この世の中の政治に関することまでお定めになった。そのひとつが十七条の憲法で、そこには以下のように述べられている」

この文に続いて『聖徳太子伝』は、『日本書紀』の伝える漢文の『十七条憲法』各条とともに、その書き下し文を載せている。

物部守屋は地蔵菩薩の変化と称された

高尾物語 44

十善戒の道

絵・橋本豊治

三密

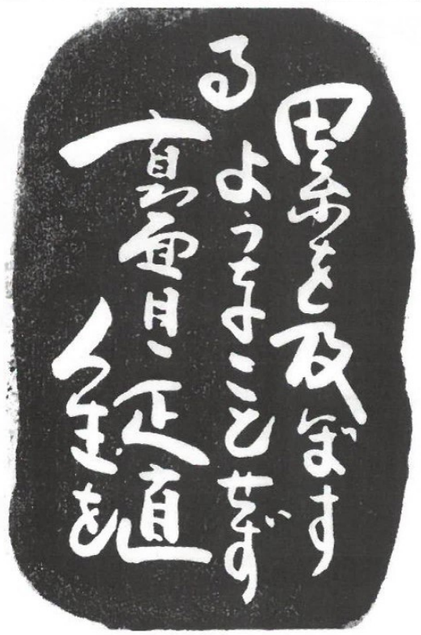
真言宗では、仏様の行い（身密）、言葉（口密）、心（意密）のことを三密と言います。仏様のような正しい行い（身）、正しい言葉（口）、正しい心（意）を心掛け、日々の生活を送ってみましょう。

有喜苑の仏舎利塔周囲に、仏教徒が守るべき、十の戒めが刻まれた、「十善戒の道」があります。

不殺生戒　生命を奪わない
不偸盗戒　他人の物を盗まない
不邪淫戒　情欲に溺れない
不妄語戒　嘘偽りを言わない
不綺語戒　不誠実な言葉を使わない
不悪口戒　悪口を言わない
不両舌戒　二枚舌を使わない
不慳貪戒　欲張りすぎない
不瞋恚戒　耐え忍び、怒らない
不邪見戒　物事の道理を弁える

また、百八階段（男坂）の上から有喜苑に通じる階段は、三密の道といい、上下に苦抜け門があります。この道では、煩悩を消すことを心に念じて、歩きましょう。

いろは　天狗の落し文 ⑪



る　累を及ぼすようなことせず　真面目正直人生を

累を及ぼすとは、自分が関わる悪い事態の影響を他人に及ぼす、つまり自分が原因で他人を巻き添えにして損害を与えるという意味です。

人は間違いを犯してしまうもので、意図せずに悪い結果になることはよく起こります。その時大事なことは、失敗を隠したりせず、影響が及ぶ人々に早めに相談して、被害を食い止めるよう努力することです。そして、その失敗を繰り返さないよう教訓としましょう。

おはなし散歩道　わたしの役目

町田市　大澤桃代

雨が降ると出払って、晴れると戻ってくる――。これは駅の利用者のために置いてある傘のお話です。

その日は、お昼過ぎから雨模様になり、一本、また一本と駅の傘が出ていきました。「ナンバー3」というタグが付いたその傘は、会社員風の若い男性の手に取られ、彼の住むマンションまでお供することになりました。思いのほか風の強い晩で、彼は傘の柄をぎゅっと握りしめます。

十分ほど歩いたでしょうか。彼の家に着くと、傘はびしょびしょのまま傘立てに突っ込まれました。（こんな濡れた状態で駅に戻るのかー）。傘は不快な気分のまま夜を過ごしました。

夜半過ぎになって雨はやんだ模様です。傘は相変わらずびしょびしょのままでしたが、朝になると部屋の窓が開き、傘がぱっと開かれて、太陽がさんさんと当たるベランダに置かれました。

（いいぞいいぞ。こうやって乾かしてもらったら、気持ちよく駅にもどれるよ）。傘はうれしくなりました。朝の光を受けて、ビニール傘がきらきら光ります。

しかし、安心していられたのもつかの間でした、突風がわき起こり、置かれていた三階のベランダから傘は舞い上がりました。（あらら……）。傘は柄を上や下に回転しながら飛んでいきます。雨はやんでも、まだ強風が治まらずにいたのです。

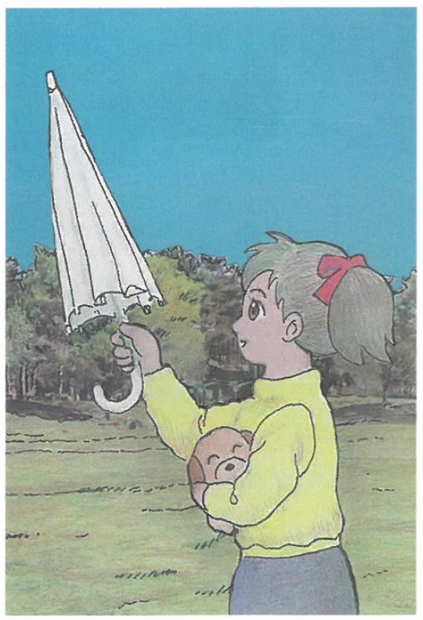
風にあおられ、飛ばされて、遠くまで運ばれました。ようやく着地した場所は緑の多い公園でした。人の姿は見当たりません。このまま芝生の上にぽつんといたら、誰にも見つけてもらえない。傘は不安になりました。だれかに運んでもらわなければ駅へは帰れないのですから。

さらに運の悪いことに、またぽつぽつと雨が降ってきました。傘は途方にくれました。そんな時です。（クーン、クーン）と、鼻にかかった少し悲しそうな声が聞こえてきました。雨に濡れて子犬が震えていました。

「子犬ちゃん、どうしたの？」。傘は声をかけずにはいられませんでした。でも、子犬は泣くばかりです。

「子犬ちゃん、そのままだと風邪を引いてしまうよ」。そういうと子犬ははっとして、傘を見ました。

「どうしてここにいるの？」と聞くと、子犬は「天気がいいから、窓の隙間から飛び出しちゃった」と答えました。「ともかく傘の下に来て」と、傘は子犬に呼びかけました。



雨宿りをしながら、子犬は「どうして助けてくれたの？　自分は濡れちゃうのに」と聞きました。「わたしは、みんなが雨に濡れないようにするのが役目だから」と、傘が言うと、子犬はすごいなと思いました。

「ところで、きみはなんというお名前？」。「ココアっていうの」。「巻き毛の色がココアみたいだもんね」と傘は褒めました。そして、「あなたの名前は？」と子犬が聞いてきたので、「しいて言えばナンバースリーかな」と傘は答えました。

朝の下で子犬は安心して過ごすことができました。しばらくすると、遠くから女の子の「ココア、ココア」と呼ぶ声が聞こえてきました。子犬は「ワンワン、ワンワン」と大きな声で応えます。

「無事でよかった！」。女の子は心から安心した声で近づいてきました。女の子は子犬を抱きあげると、一方の手で傘を閉じました。（ココアを守ってくれてありがとう）。心の中でお礼を言うと、傘をたたんで自宅に持ち帰りました。後日、女の子の手で駅に戻されたのは言うまでもありません。

（挿し絵・小出　茂）

令和四年 正月期間の御護摩修行の流れとお願い

当山の感染症防止対策について

【感染防止の基本】
- 大本堂、各部署は常時換気を徹底しています
- 境内各所は定期巡回を行い、消毒を実施致します
- 消毒液の設置（手指の消毒にご協力をお願いします）
- 事前の検温とマスク着用の徹底をお願いします
- 体調が優れない時には外出をお控え下さい

【大本堂内での対策】
- 靴袋をご持参下さい
- 堂内での私語はお控え下さい
- 堂内への入場は三百名までと制限します

【坊入りについて】
- 例年、七日まで行っている新年の御挨拶（おとそ膳）は本年も中止と致します

【御護摩受付所・信徒休憩所】
- 信徒休憩所は使用中止と致します
- 御朱印及び健康登山押印は御護摩受付所にて授与致します　※先月号掲載より変更致しました

※御参拝の皆様には、検温、マスク着用、消毒等感染予防を行い、体調に留意の上御来山下さいますようお願い申し上げます

※御参拝できない方には郵送にて、御護摩札、縁起物、御守り等を授与致します

御信徒の皆様にはご不便をお掛け致しますが、何卒御理解と御協力の程、宜しくお願い申し上げます

御質問等御座いましたら高尾山薬王院信徒部までご連絡をお願い致します

尚、今後の感染状況により、対策等が変更になる場合があります

高尾山薬王院信徒部　TEL〇四二-六六一-一一一五

新たな年の安寧を祈る

正月限定 新春特別祈祷札

令和四年も正月期間（一月一日～一月三十一日）限定で「令和新春特別祈祷札」を授与致します。

近年は自然災害や疫病の流行等、様々な災厄が頻発する時代であります。しかしながら、年が改まり心機一転する正月を迎えるにあたり、種々の災いが少ない、明るい一年となるようにと、特に御祈願申し上げる次第であります。御信徒の皆様方におかれましては、この機会に是非御来山を頂き、新たな年の安寧を共にお祈り下さいますようお勧めいたします。

ご祈祷料は一体**三萬円**となります。

願意（お願い事）は「**除災開運**」のみとなります。

御来山当日でのお申込みも可能ですが、正月期間の御護摩受付所は混雑が予想されるため、事前でのお申し込みも頂けます。また、御信徒様各位の御都合により高尾山へ御来山頂けない方の為に郵送でのお取り扱いもいたしておりますので、ご希望の方は手紙・FAX・メールにてご連絡ください。

■お問い合わせ先

電　話　042-661-1115
FAX　042-664-1199
メール　shinto@takaosan.or.jp

迎光祭のお知らせ

令和四年元旦の迎光祭につきましては、新型コロナウイルス感染症防止対策の観点から、令和三年同様に高尾山の山頂で行うのではなく、薬王院の境内地に祈願所を設けて実施致します。

迎光祭とは薬王院の伝統的儀式を組み込んだ、初日の出を迎える行事で、僧侶の読経や山伏の法螺により、参列者の無病息災など一年間の安全を祈願して、新年を祝います。

大晦日から元日にかけて終夜でケーブルカーの運行が行われる予定です。晴れていれば、横浜方面から昇るご来光を拝すことが出来ます。

郵送御護摩申し込み受付について

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。遠方の御信徒や、参拝できない御信徒の皆様の為に、御護摩札の郵送をお受けしております。

手紙、FAX等での申し込みをお願いしておりますが、「高尾山薬王院公式ホームページ」内の御護摩祈祷の御案内からインターネットにて、直接お申し込み頂くことが出来ますので、是非ご利用頂きますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先☎〇四二-六六一-一一一五
「郵送御護摩係」まで

御護摩修行のおすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行をお勤めしております。

御護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩悩を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様の祈りが御本尊に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、御供物と共に清浄な場所に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。

苗木奉納

古来より高尾山の御信徒は、自分のお願いが成就した時に感謝とお礼の意味を込めて、苗木を奉納する習慣があります。今日でも、お杉苗奉納は続いており、参道の大杉原には、杉苗奉納者の芳名板が、板塀のように並んでおります。

高尾山では寺法において「殺生禁断」を第一義に、むやみに草木を切ることを厳しく戒めてきました。私達は信仰心と共に大自然を守り、また大自然から守られつつ共存共栄し、今日の景観を造りあげてきたということを、忘れてはならないと思います。

尚、毎年**十二月十日**までに、**一万円以上**を御奉納頂いた方のお名前を、翌年より掲示させて頂いております。

高尾山薬王院の御護摩札

(大)	10,000円
(中)	5,000円
(小)	3,000円
お護摩	3,000円以上
お護摩	5,000円以上
お護摩	10,000円以上
特別大護摩	30,000円以上
開帳大護摩	50,000円以上
特別開帳大護摩	100,000円以上

お護摩の願事

お願い事は一体一願意とします。

併願(二願意)は一万円より受け賜ります。

但し、五千円で家内安全と商売繁昌のみ併願とさせて頂きます。

お護摩札には年令・生年月日等は入りません。

(　)内の略体をお書き下さい

- 家内安全(家)
- 商業繁昌(商)
- 事業繁栄(事)
- 交通安全 車内用札(車・交)
- 交通安全 神棚用木札(木・交)
- 身上安全(身)
- 災難消除(災)
- 厄除(厄)
- 身体健全(体)
- 当病平愈(病)
- 開運(開)
- 良縁成就(縁)
- 安産成就(安)
- 入学成就(入)
- 心願成就(心)
- 御礼(礼)
- 奉納杉苗(杉)

令和四年　壬寅(みずのえとら)
高尾山節分会追儺式参加申込の御案内

二月三日(木)

歳男・歳女　修行時間

第一回	午前九時
第二回	午前十時半
第三回	正午
第四回	午後一時半
第五回	午後二時半

尚、修行時間の三十分前、もしくは、定員になり次第受付を締め切らせていただきます。もし時間に間に合わない場合は次回の修行時間にお入り頂きますので、何卒、ご了承下さいませ。

高尾山恒例の節分会(豆まき式)が、二月三日、身上安全、除災開運、災厄消除、福寿円満等の祈願をこめて開催されます。

御信徒の皆様には、歳男・歳女に参加されますようおすすめいたします。

冥加料(祈祷料)三万円

お問い合わせ　高尾山節分会係
電話〇四二(六六一)一一一五

高尾山修行場めぐり 9

迷散筒

有喜苑の仏舎利奉安塔前には、「迷散筒」が建立されております。

迷散筒には回転する三つの筒があり、それぞれ「貪瞋痴」と刻まれております。これは、人の心を惑わす欲や怒り、無知という三つの毒である貪瞋痴を意味しております。

貪…欲望に執着する貪りの心

瞋…思い通りにならないことに対して怒る心

痴…自己中心的で、道理に適わぬ愚かな心

三毒を解毒し、慈しみの心を育てるためにも、迷散筒を回転させ、心の迷いを散らし、人間が本来持つ、清らかな心に気付けるよう心に留めましょう。

高尾山火渡り祭

柴燈大護摩供御壇木特別志納御案内

（三月十三日　日曜日）

當山では毎年三月第二日曜日に春を招く恒例行事として、祈祷殿火渡り本尊ご寶前にて、高尾山修験道による火渡り祭が盛大に執り行われます。

火渡り祭とは、高尾山主大導師のもと、全国各地の霊山で修行を重ねた山伏が、一心に諸願成就の祈りを捧げる、関東屈指の大祈祷法要であります。

この浄行にあたり、御信徒の皆様方より柴燈大護摩供にて供される、御本尊・飯縄大権現様の功徳を顕す御壇木のご志納を一本一万円にて募っております。

ご信徒の皆様、並びにご講中の講員様方におかれましては、高尾山の浄行に大いなるご信助を賜りますよう、謹んでお願いを申し上げる次第でございます。

尚、ご志納の証として、ご芳名を薬王院参道に一年間掲示致します。御志納方法についての詳細は、高尾山薬王院信徒課までお問い合わせ下さい。

電　話　〇四二-六六一-一一一五
FAX　〇四二-六六四-二九九
大本山　高尾山　薬王院　信徒課

※今後、新型コロナウイルス感染症の流行状況等により、実施内容が急遽変更となる場合がありますことを、御承知おき下さい。

高尾山の昆虫

ベニヒラタムシ

146

ヒラタムシという扁平な甲虫の仲間がいて、総じて地味で小型種が多い中で、ベニヒラタ、エゾベニヒラタ、ルリヒラタの三種は大型且つ美麗種です。

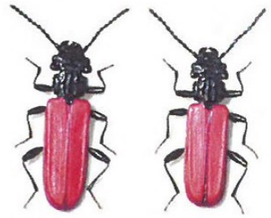
高尾山で見られるのはベニヒラタムシ（紅扁虫）で、黒色のボディに鮮やかな光沢のある赤い上翅が特徴的です。

昆虫の中にはヒラタと和名が付く種は少なくありませんが、本種の場合は12㎜内外の体長を持ちながら、側面から見るとまるでベニア板のように厚みがなく2㎜まではないのではないかと思ってしまいます。

そして大アゴは捕食に適したように発達していて、肉食性であることを物語ります。

体のみならず脚も同様に扁平で、これを武器に樹皮に入り込み他の昆虫を捕食すると思われ、優秀なハンターなのかも知れません。

私は朽ち木を崩したり、樹皮を剝がすことを好まないためあまり出会ったことがありませんが、飛翔している赤い虫を捕らえてみると本種だったことが何回かあり、必要に応じて樹皮から離れるようです。本種に出会い横から見る機会があれば、まさに押し潰されたような造形に感心してしまうと思います。



（撮影・文　松島　孝）

高尾山報助成金志納者御芳名（順不同・敬称略）

八王子市　志茂　サト子
足利市　荻野　キヨ
町田市　坂口　安宏
八王子市　児島　イツエ
相模原市　中里　暉久江
児玉郡　植井　実
甲州市　植野　幸子
八王子市　金子　喜美子
〃　菅沼　千代子
葛飾区　高田　勝弘
札幌市　武田　雄二
前橋市　原沢　和子
練馬区　深谷　薫
川崎市　松井　昭三
八王子市　落合　義晴
行田市　竹村　元嗣
横浜市　佐藤　安久
熊谷市　小林　琴枝
久慈郡　早乙女　和江
塩尻市　澤田　武彦
東久留米市　吉岡　智代
松本市　寺澤　和男
前橋市　野口　道雄
〃　吉野　政治
相模原市　椎葉　ふみ子
太田市　市川　貴也
富岡市　茂原　登
松本市　後藤　和一郎
港区　鏡　照院
台東区　鈴木　徳太郎
大田区　平林　弘明
八王子市　菱山　愛子
羽生市　岡戸　信雄
伊勢原市　佐々木　晋介
日野市　太田　雄三
館林市　三宅　正基
東村山市　安藤　和子
八王子市　池浦　國秋
熊谷市　江森　静子
〃　小田川　トメ
川口市　吉澤　直樹
〃　吉澤　和
千代田区　工藤　房太郎
杉並区　大崎　トシ子
府中市　井上　瑞穂
横浜市　白石　京子
鹿沼市　荒川　昭巳
佐野市　田尻　舜三
比企郡　勝又　敏行
川越市　澤田　進
行田市　岩崎　薫
秩父市　黒澤　茂
前橋市　佐々木　好二
仙台市　本郷　則子
日高市　関谷　斉
八王子市　小池　まり子
所沢市　三ツ橋　守
ふじみ野市　林　憲一
小平市　関　道雄
八王子市　萩原　清次
羽生市　宮崎　幸子
横浜市　渡辺　和雄
甲州市　中村　孝子
鴻巣市　石川　益雄
さいたま市　大島　美恵子
八王子市　秋山　誠
足利市　加藤　清美
太田市　小林　洋右
館林市　野村　シヅ
邑楽郡　深田　節子
大里郡　石川　謙一
鹿沼市　木村　益雄
前橋市　高木　孝子
八王子市　根岸　聡子
邑楽郡　野村　仁一
八王子市　町田　良樹
〃　石井　忠明
熊谷市　茂木　武
新座市　彰山　粧麗
八王子市　川村　正義
本庄市　福田　一夫
邑楽郡　井達　立司
高崎市　織田　早苗
八王子市　渋谷　多恵子
草加市　富田　春江
みどり市　荻原　一雄
さいたま市　須賀　卓雄
熊谷市　鈴木　栄司
西東京市　辰巳　精子
中野区　(有)コヤノ建装　照森
富里市　森　キミ子
葛飾区　髙橋　晶
杉並区　須藤　大治
三鷹市　岡野　
八王子市　土方　良二
〃　坂本　ミチ
〃　山本　千枝子
多摩市　坂本　英雄
横浜市　廣池　和行
相模原市　小山　剛広
熊谷市　松岡　健次
本庄市　山田　栄夫
秩父市　井上　操
児玉郡　上原　一夫
八王子市　梅澤　富士子
足立区　中山　恵司
加須市　野本　新蔵
横浜市　小黒　美智子
伊勢崎市　田島　充
前橋市　小池　武夫
朝霞市　台　雲寺
港区　増田　タカ子
八王子市　峯尾　洋一郎
〃　高尾井上美装
〃　浦野　節郎
〃　阿部　ヨシ子
板橋区　小林　妙子
八王子市　天野　章雄
高尾山健康登山者一同

人車一体交通安全祈祷

高尾山麓　自動車祈祷殿

正月御祈祷時間

元日　午前零時より午後四時まで
二日・三日　午前八時より午後四時まで
四日～七日　午前八時半より午後四時まで

尚、感染症予防対策の為、休憩室のご利用はお控え頂いております。申込書の記入は、車中にてお願い致します。

複数台をお申し込みの場合には、事前にFAXにても受け付けております。

何卒ご理解のほど、宜しくお願い申し上げます。

電　話：〇四二-六六一-一一一八
FAX：〇四二-六六二-二一三五

初詣 心のふるさと 祈りのお山 高尾山

一月行事日程

一日
迎光祭
元旦特別開帳大護摩供

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）

四日、十六日、二十八日
弁天様御縁日

八日
仏舎利詣り（仏舎利塔）

十一日
初甲子大黒天祭

十七日
蛇滝清龍様御縁日

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）

二十八日
琵琶滝不動尊御縁日
奥の院開扉供養
（十時奥之院）

三十日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
（十二時半山麓不動院）

【お願い】

お正月三ヶ日は、高尾山麓をはしる国道二十号線は大混雑が予想されます。

高尾山麓の駐車可能な場所が限られておりますので、マイカーでのご参拝はご遠慮ください。

―新春大護摩奉修特別時間―

	元日（土）	2・3日（日）・（月）	4～7日（火）～（金）	11～14日（火）～（金）	8・9・10日 15・16・23日（土曜・日曜・祝日）	17日以降（土曜・平日）	30日（日）
午前	0:00						
	1:30						
	3:00						
	4:30						
	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00
	7:30	7:00					
		8:00			8:00		
	9:00	9:00	9:00	9:00	9:00	9:30	9:00
	10:00	10:00	10:00	10:00	10:00		10:00
	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00
午後	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:30	0:30
	1:00	1:00	1:00	1:00	1:00		
	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00
	3:00	3:00	3:30	3:30	3:30	3:30	3:30
	4:30	4:00					

★正月期間中は御護摩受付所や大本堂周辺は、大変混雑致します。

お昼前後の御護摩修行には大勢の御信徒様が集中することが予想されますので、密集を避けるためにも、時間を調整しての御来山をお勧めいたします。

◆お知らせ

正月から節分までの期間中は、繁忙期につき、蛇滝及び琵琶滝での滝行の指導は行いません。

ただし、通常通り個人での滝行を行うことは出来ます。

また、同期間中は大師堂での御回向や、不動院での御詠歌、月例写経会も実施されませんことを御了承願います。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 菅谷秀文
編集人 菅井倫浩
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院ホームページ
https://www.takaosan.or.jp